

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、
イエス・キリストにおいて示された
愛と奉仕の生き方に学びつつ
世界のYMCAとのつながりのなかで、
次の使命を担います。

私たちは、
すべての人びとが生涯をととして
全人的に成長することを願い、
すべてのいのちを
かけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、
一人ひとりの人権を守り、
正義と公正を求め、
喜びを共にし痛みを分かちあう
社会をめざします。

私たちは、
アジア・太平洋地域の人びとへの
歴史的責任を認識しつつ、
世界の人びとと共に
平和の実現に努めます。

2017年9月1日発行 (毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円 (外税) (送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/神崎 清一 編集人/山根 一般
印刷/あかつき印刷株式会社

災害支援について 考える

東京災害ボランティアネットワーク代表
東京ボランティア・市民活動センター所長
「広げれボランティアの輪」連絡会議会長

山崎美貴子



自然災害が発生した場合に、多くのボランティアが直後に駆け付け、さまざまな働きを担います。この傾向が全国的な広がりを見せ始めたのは阪神・淡路大震災以降だと考えられます。そのため、阪神・淡路大震災が発生した年を「ボランティア元年」と称する人びとも少なくありません。それほどに突出した数の若者たちが災害支援に駆け付けたのです。

以来、各地で勃発する自然災害に多くの人びとが支援に駆け付け、災害の地に活動拠点のあったYMCAは、全国からメンバーや、つながりのある若者たちが現地にはせ参じています。以来、YMCAは災害の場ではなくてはならない存在となり、特に1年前に発災した熊本県での地震では災害を直接受けた被災者でありながら、支援者として役割を果たすこととなりました。運営を受託されていた体育館が避難場所となつて、その運営にも関わることとなり、大きな役割が振り当てられたのです。

行政が果たすような役割までも背負うという体験でしたが、災害時は行政の手が足りず、誰かが担わなければ、人の命さえ守れない事態に直面します。こうした事態が今後も予測されるのか、例外であるのかを見極める場面も多々あります。近年、全国各地で大きな水害が発生し

ています。突然、今まで一度も経験したことのない大量の雨が降り、地盤が崩壊して土砂が流失し、流木が家屋を押しつぶし、多くの死者が出ています。地球温暖化によるこの傾向にどう対応していくのか、検討が求められます。

東日本大震災は、東北地方を中心に大規模な被害をもたらしました。家屋は全壊、あるいは半壊し、死者の数は19,225人、避難者の数は228,863人(2015年復興庁調べ)にも上り、さらには東京電力福島第一原子力発電所の事故により、大量の放射性漏えいによる重大な原子力事故を引き起こし、中・長期にわたる避難命令が出ました。あれから、6年5カ月を経過し、復興支援のフェーズも異なってきています。自立再健できている人びとばかりではなく、災害の以前から抱えてきた生活課題がさらに厳しい状況に追い込まれ、将来に見通しが持てない人びと、また、広域避難者として暮らす人びとが大勢おり、その人たちへの支援も必要です。災害を支援する団体や組織が横につながり、情報を共有し、役割を分かち合い、支え合い、学び合う活動のネットワークを日頃から組織的に構築しておくことが求められますが、すでにそうした組織ができ始め、動き出していることは大変心強いです。

レポート

相手と向き合って
心を合わせていくこと。
(仏語: 愛和・共感的関係の意)

名前を呼び 言葉を交わし 「共に生きる」

この世界で、さまざまな違いをもった私たちが「共に生きる」とはどういうことなのでしょう。私は最近それを、聖書にある「名前を呼ぶ」という事柄から教えられています。

「名前を呼ぶ」というのは、少し難しい表現をすると、その存在を言葉化することであり、その存在にこの世界における意味を見いだすということです。それは創世記で神さまが「光あれ」と言われ、闇の中に光を、混沌の中に秩序を造られたように、「言葉によってこの世界に新しい命を生み出す働き」です。初めの人、神さまに造られ「アダム(土)」と呼ばれました。そしてそのアダムが、この世界のすべての生き物に名前を付けたと書かれています。一つひとつの生き物に意味を見だし、命を吹き込む働きを、神さまはアダムに託されたのです。私たちに対しても、この「新しい命を生み出す働き」が委ねられていると感じています。

そして、アダムがその助け手として造られたもう一人の人と出会う、あの感動的な場面には、「共に生きる」ということの意味が凝縮されているように思うのです。アダムは助け手として造られたその人を、次のように呼びました。

「ついに、これこそわたしの骨の骨 わたしの肉の肉。これをこそ、イシャーと呼ぼう まさに、イシャーから取られたものだから。」創世記2章23節(新共同訳) ※「男・女」という訳語は筆者が削除
「あなたはイシャー」「あなたはわたしの骨肉。あなたはわたし自身」「あなたの命はわたしの命。あなたの痛みはわたしの痛み」

アダムはそこで出会った「共に生きる」人を、そのように言葉化し、その存在に意味を見いだしたのです。私たちは互いに「あなた」と呼び合う中で、互いの命を育んでいくのだと思わされます。そして、その私たちが共に世界を眺めながら言葉を交わしていく時、世界に意味が見いだされ、そこにまた新しい命が生まれていくのです。これこそ、さまざまな違いをもった私たちが「共に生きる」、そこにある命の希望です。

「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」ヨハネによる福音書1章3,4節(新共同訳)

Vol.23

We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参加するユースからの発信

◆千葉YMCA「小学生野外活動アドベンチャー／夏・冬・春シーズンキャンプ」

◆内容：リーダー仲間とリーダー会（ミーティング）を通して全体の狙いを考え、それが促進されるようなプログラムを組み立て、実施する。子どもたちの安全と健康を第一に考え、その中で子どもたちが体験的に学べる環境を作り、一緒に楽しむ。



子どもたちの後ろが井上さん

私は、日常的には小学生の野外活動に参加しています。シーズン（夏・冬・春）になるとキャンプに参加してきました。リーダーを始めた当初は、自分のグループの安全面を意識することで精一杯でした。しかし、経験を重ねていくうちに少しずつ、活動を行う中でメンバーを主体と考え、限られた時間の中でどのような働き掛けを行えば、メンバーは楽しめるのかを考えることができるようになりました。私がリーダーをしている中で、「メンバー主体」ということがとても大切なんだと思いました。そのためには、活動やキャンプに参加する子どもたちの理解と本当に子どもたちが楽しく参加できるのかということとリーダー仲間と一緒に考え、同じ目的を持って子どもたちと関わることの大切さを学びました。

現在私は大学4年生ですが、リーダーとしての残りの時間、これまでの経験を大切に、どんな時もメンバーの視点に立って考えられるリーダーでいたいと思います。将来教員を目指していますが、教員になった時も、子どもの視点に立って考えられる指導者でありたいと考えています。

井上 葵（ベルリン）

避難所としての備え

—国際青少年センター東山荘

YMCA東山荘のある静岡県でも東海（東南海）地震や富士山噴火などへの備えについて、自分のこととして現実的に捉えることが求められています。

今年の3月、御殿場市との防災協定を結んでいるYMCA東山荘では、地域の方々との共働により「防災体験特別プログラム」を開催し「タッチケア」の学びました。実際に大規模避難所運営に当たった熊本YMCAスタッフの丸目陽子さんを招いて、避難所での生活の実態について話を聞き、備蓄品やペット同行避難についての学びや、非日常のストレスを和らげるタッチケアについて、さらには救急講座などの学びの機会を設けました。

講演会やワークショップを通して、防災・減災の知識や技術の蓄積を図り、実際の災害を想定して地域の方々との顔の見えるつながりを強めることは大変重要です。今年度以降も継続して実施する予定です。

YMCA東山荘は、災害時には御殿場市の指定避難所として、普段の研修施設の働きと並行して地域の防災拠点としての機能も期待されています。

日本YMCA 同盟 盛岡 美貴



たくさんの人が防災体験に防れた

「これから」の災害支援を考える

～他団体や地域とのポジティブネット～

医療・福祉



医療・介護と避難所運営をつなげる

—医療ソーシャルワーカーの役割

東京大学YMCAから生まれた隣人愛を志す賛育会は、熊本地震の被災者と、被災者でありながらも、なおかつ支援者であり続ける熊本YMCAスタッフを想い、支援協力を申し出ました。そこで、東日本大震災での支援活動経験があった私が、第2陣として派遣され、専門性を生かした、介護と医療・福祉の視点で避難所支援することができました。避難所という新しいコミュニティではさまざまな世代の関わりがあることで、お互いの見守りができるなど、子育て世代から高齢者、障がいのある方などが、お互いを支え合う仕組みが必要です。YMCAのコミュニティを形成する力と、健康や要介護の予防、疾病から生活者である避難者を支える賛育会の特性が連携して行えたことだと思います。



連携する団体で毎日打ち合わせを行った

私は、医療ソーシャルワーカーの視点でYMCAを中心に避難者と支援者（外部の保健師や医師、ケアマネージャーなど）をつなげることを考えました。ソーシャルワーカーの働きを継続できたこと、そして避難生活において生活不活発の予防を含めた介護職の支援は、今後の災害支援を行う上で大きな道になるだろうと思います。

社会福祉法人賛育会 賛育会病院地域連携室 富永 千晶

ペット



動物の命と人権を考える

—ペットと一緒に避難



預り所「ワンちゃんハウスのボランティアと預り犬

被災地の避難所には多くの避難者が一気に集まってきます。体が不自由な方、高齢の方、小さな子どもとその家族。命から逃げてきた瞬間は、「命があって良かった」とみんな声を掛け合いますが、しばらくすると避難環境にも関心が向いてきます。ペット同行避難者たちにも「なんで犬が？」「うるさい、臭い、かゆい」「抜け毛が気になる」「怖い」……そんな言葉が投げられ、避難所からはじき出されてしまうこともしばしばありました。ペット同行避難者は、危険と分かっているにもかかわらず、車中避難を選ぶ方や、被災した自宅に戻り「家族（ペット）をつないでしまうこと」になってしまった方もいました。

動物福祉活動NPO法人人と犬の命を繋ぐ会 代表理事 岡本 文利

YMCAの災害支援は、古くは関東大震災から実施され、その後も多くの災害で支援活動を行ってきました。時がたち、人の暮らしや社会の仕組みも多様に変化する中で、他団体との協働は非常に重要なものになってきました。そのような状況下においてYMCAは、どのような役割を担っていくのでしょうか。

今号では熊本地震の支援活動でのYMCAと他団体、地域との協働から、ポジティブネットによって実現される支援について紹介します。

避難所で生かされた日常での働き

—益城町総合運動公園では、そして今

4月14日総合体育館事務所内にいた私は、最初の揺れで震度7の地震を体験しました。大きな余震が何度も襲い、16日の本震の際はこの世の終わりかと思いました。

避難所運営を担う中で目標は、災害関連死を出さないことです。前震後天井が一部落ちていたメインアリーナへ避難者受入れをしなかった判断、トイレ掃除を徹底して、エコノミークラス症候群を防ぐ取り組み、子どもや高齢者の健康の維持など、あらゆる力を総動員した取り組みは、すべてが命を守るためのものでした。そうでなければ、命を守ることはできなかったかもしれません。

最大1,500を超す人々の命を守ることは重責でしたが、YMCAキャンプの経験がとて役に立ちました。困難な中にも組織的に、日々の目的を明確にしながら、共に活動する人、団体の力を最大限に生かし、避難所において的確に判断をすることができたと思います。そしてまた、楽しむことも忘れずにいられました。

震災から1年4カ月が過ぎましたが、避難所を終了した後も、益城町の方とつながりを持ち、現在もこれからも支援を続けていきます。苦難の中にある方たちと共に悲しみ、共に喜び、希望をもって一步一步進むこと、そして経験を伝えることで、防災・減災に少しでも貢献したいと願っています。現在所属しているながみねファミリーYMCAでは地域自治会と連携して防災祭りなどを行っています。日頃から地域の方々との顔の見える関係づくりを実践している毎日です。

熊本YMCAながみねファミリーセンター館長 丸目 陽子



初期の避難所の様子 衛生、介護、プライバシーなどさまざまな問題を抱えていた



子どものニーズに出会う

—ワールド・ビジョンとYMCAの協働



避難所内に設置したプレイルームで子ども達は安心して過ごした

昨年4月の熊本地震発災後、ワールド・ビジョン・ジャパン（以下、WVJ）は、益城町総合体育館で避難所運営をしていた熊本YMCAと協働し、被災により精神的に不安定になりがちな子どもたちが安心して過ごせるチャイルド・フレンドリー・スペース（CFS）支援を、「プレイルーム」「プレイパーク」の運営を通じて行いました。

地元を根を張り、保育・教育・青少年活動を行っているYMCAと、国内外の緊急支援活動で「子どものための心理応急処置（PFA）」などの知識・経験を蓄えているWVJが、それぞれの強みを生かし、迅速かつ適切に「子どもたちへの心のケア」を提供することができました。

将来の災害などに備え、協働は継続しています。今年4月からは、「子どものためのPFA」研修を全国8カ所のYMCAで実施。専門家だけでなく実施できるPFAを多くの方に知っていただき、災害や事故でストレスを抱えた子どもに対し「心の応急手当」ができる人材の裾野を広げることを目指しています。また、熊本地震支援で、YMCA、WVJ、さらに多くの子ども支援関係者/団体がつながったように、この研修を通して、一人でも多くの子ども支援関係者がつながっていくことを願っています。

(特非)ワールド・ビジョン・ジャパン 支援事業部 中村 夕貴

「明日へつなげる使命を得て」

熊本YMCAより発行

熊本地震の地震学的特徴は、最大震度7強の激しい揺れが2度続けて発生したこと、体に感じる余震が熊本県内で本震発生から1年を経過しても4,000回以上続いていること、また県下広域にわたる被害範囲の広さと言われています。

さらにもう一つ、国内でも例がないと言われているのが、最大避難者数約1,600人（熊本YMCAによるカウント）となった益城町総合運動公園と、同じく約200人の避難者を収容した御船町スポーツセンターという大規模指定避難所を、行政ではなく民間団体のYMCAが運営主体となったことです。

自らが被災しつつ、支援を行うのは大規模災害ではしばしば美談として語られます。しかし、現実にはそう簡単なことではなく、熊本YMCAは発災直後から同時多発的にさまざまなことが起こり、その対応に迫られました。

これらを「稀有な事象の記録」として残すのではなく、この経験をどのように生かすのかが問われているはず。将来起こり得る大規模災害の後に一人でも多くの命を救いたい、そんな思いを込めて制作した「明日へつなげる使命を得て」を、YMCA関係者はもちろん、一般の方から、行政、NPO、学術機関など多くの方々にと読んでいただきたいと思っています。

まずは下記までご連絡ください。
熊本YMCA本部事務局C1部
Tel.096(353)6397 メール: icr@kumamoto-ymca.org
熊本YMCA 富森 靖博

「明日へつなげる使命を得て」
64ページ版 定価1,000円(税込・送料別)
※売上げは熊本YMCA震災復興支援基金に充てさせていただきます。

NEWS

各地の動きをご紹介します。

●「将棋教室」開催中 —北海道YMCA

札幌YMCAでは、今年の4月に将棋クラスを開講しました。開講して間もなく、公式戦で連勝を続けた中学生プロ棋士、藤井聡太四段の活躍もあり、地元の新聞やTV局から取材を受けるなど注目を集めました。

この将棋クラスを開講するにあたり、ある記事より日本将棋連盟北海道支部連合会の工藤学会長が将棋の普及活動に力を入れていることを知り、工藤会長にお願いをして、現在、当YMCAで講師をしていただいている女流棋士2段・久津智子さんを紹介していただきました。会長と久津先生との打ち合わせの中で、将棋は頭の回転を良くするばかりではなく、分析力、忍耐力、行動力、決断力なども鍛えられ、バランスの良い成長が期待できる上、さらに勝負する過程で礼儀作法も身に付くことを伺いました。



熱心に将棋を楽しむ子どもたち

今、将棋教室にはアフタースクール（学童）のメンバーが7人、将棋クラスのみ3人、複数受講者が6人と、合計16人の児童が通い、みんなルールブックを片手に真剣に将棋盤に向き合っています。開講当初は60分クラスの設定でしたが、時間があつという間に過ぎてしまい、時間が短いとのことで現在は90分枠に拡大し、子どもたちは毎

週楽しく通ってきています。まず10級からスタートし、昇級するにはクラスの中で10人と対局して勝った後に、先生との対局で合格をいただいてから昇級していくことになります。今後は大会への出場も考えており、これを機に多くの子どもたちがYMCAに通過して将棋のプロ棋士を目指すほどの実力を身に付けてくれることを期待しています。

北海道YMCA 加納 昌枝

●「平和のための開発教育セミナー」を開催 —京都YMCA

京都YMCAでは6月26日と7月10日に、平和のための開発教育セミナーを実施しました。地球規模の諸課題と私たちの生活とのつながりを捉え、その問題にどう向き合うか「共に考え、共に学ぶ場」として3年前から開催しています。今回は「フェアトレードってなに？」というテーマで2回連続実施しました。



シサム工房(<http://www.sisam.jp/>)の店頭見学

フェアトレードとは、途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入し、途上国の生産者を支援する貿易のことです。1回目は22人が参加し、誰もが好きなチョコレートを作りながらその陰に潜む力カ栽培での児童労働問題について考え、解決策の一つとしてフェアトレードを学びました。2回目は14人が参加して京都、大阪、東京など8店舗でフェアトレード事業を展開する「シサム工房」の池澤匡彦さんをゲストとしてお迎えしました。先進国では多くの方が安く大量に生産された服、いわゆるファストファッションを消費していますが、その生産過程には環境破壊や生産者の健康被害、児童労働など多くの問題を含んでいます。シサム工房は「お買い物とはどんな社会に一票を投じるか」というコンセプトの下、アジア5カ国12のNGOと協力し、生産者コミュニティを支援する仕組みをつくり、継続的にフェアトレードを行いデザインや質にこだわった商品を展開されています。池澤さんのお話を伺った後、皆でシサム工房の店舗を訪問して実際にフェアトレード商品を手にとってお買い物を楽しみました。

参加者からは「フェアトレードについて、自分たちに新しくできることを知るいい機会になりました」「じかにフェアトレード商品を見ることができたので今後買い物するときの選択肢が増えました」という声をいただきました。

自分の「物を買う」という行為がどのような影響を生み出すか。手に入れようとする食べ物や服の向こうに生産者のどのような生活があるのか。手に取る前に一呼吸置いて考えたいと思います。

京都YMCA 関 つくみ

アジア・世界のYMCAから

◆カンボジアでのオルタナティブ・ツーリズム

—アジア・太平洋YMCA同盟

台中YMCAの若者がカンボジアYMCAの8日間のオルタナティブ・ツーリズムに参加しました。若者たちはストリート・チルドレン・センターや孤児院で子ども達に勉強を教え、一緒に歌い、遊び、農場や学校建設の手伝いを行いました。カンボジアに生活する人びとの視点からその国を理解する経験は生涯の財産となります。



子どもたちと一緒に農場へ(撮影A. Calderaro氏)

◆「Why Not?」キャンペーン実施中 —オーストラリアYMCA同盟

結婚、失業、心の問題など若者が直面する課題をテーマに「Why Not?」キャンペーンを実施中。希望のメッセージとしてヒット曲「Y.M.C.A.」をボーイ・ジョージと組んで再現しました。<http://www.whynot.org.au/>

◆「私たちが望むアフリカ」マダガスカル若者の問題への取り組み

—アフリカYMCA同盟

植民地時代の影響が残り民族のアイデンティティを今も持てずにいるマダガスカル。若者が率いて平和と繁栄を築くことを願い、若者に教育や研修を通して豊かな国をつくるよう働きかけています。

●上記トピックの詳細は、日本YMCA同盟HPの「世界のYMCA」ページよりご覧いただけます。
<http://www.ymcajapan.org/world/index.html>

追悼

聖路加国際病院名誉院長 日野原重明氏

7月18日、医師として、クリスチャンとして、日本の社会に多大な貢献をされた日野原重明先生（聖路加国際病院名誉院長）がご逝去されました。YMCAとのご縁も深く、京都帝国大学での医学生時代を学生YMCAの寮「地壇寮」で過ごされ、日中戦争当時、中国本土での中国難民救済施療団の派遣（後の日本基督教青年会医科連盟につながる）にも尽力されました。その後、今日まで東京YMCAの会員、アドバイザーとしてのお働きを始め、全国での講演、寄稿、研修の講師などを通して、長きにわたってご指導をいただきました。日野原先生は「私たちが究極的に守りたいものは、天から与えられためいめいの命です。どんな外力をも排して、守り貫かなければなりません」、そして「人命を守ることは人間の本性でなくてはなりません」という強いメッセージを、いつも述べておられました。後年には、未来を創る子どもたちのためにも多くの言葉を残しておられます。

2013年に熊本YMCAの中村賢次郎さんが日野原先生を訪ねた際のインタビューが、次のアドレスから視聴できます。ぜひご覧ください。

<http://www.kumamoto-ymca.or.jp/portal/8408.html>

日野原先生のこれまでのお働きに心から感謝し、神様の近くで安らかに過ごしてられることを思います。

一般財団法人日本宝くじ協会から寄贈

一般財団法人日本宝くじ協会より、全国YMCAの行う地域奉仕プログラムのために今年度は集会用テント80張を寄贈いただきました。寄贈いただいたテントは全国17YMCAの36のキャンプ場および施設に配布され、それぞれの地域活動や青少年育成のための活動に使われます。



たくさんの親子が訪れた「子育て応援 水遊び」(東京YMCA)

7月7日には日本YMCA同盟にて贈呈状の受領式が行われました。受領式では東京YMCA、熊本YMCAから昨年度の活用報告があり、特に熊本YMCAからは「平成28年熊本地震」後に避難所となった施設での活用の様子が報告されました。

次号(10月号)から紙面が変わります。ご期待ください。